

地方都市における近代芝居小屋の盛衰

盛岡市の検討

小野澤 章子 ・ 細江 達郎

I. 問題設定

日本には各地に「芝居小屋」と呼ばれる劇場がある。香川県琴平町の「旧金毘羅大芝居(金丸座)」や福岡県飯塚市の「嘉穂劇場」などが有名で、大歌舞伎はもちろん大衆演劇などが上演され、各地域の重要な文化資源、あるいは観光資源として注目されている。それら芝居小屋の多くは明治から昭和初期に建築されたものだが、現在のような人々の利用は設立以来継続していたわけではない。芝居小屋ごとにさまざまな事情があるが、ほとんどの芝居小屋がかなりの期間利用されなくなり、また廃屋同然に放置されたものもあり、場合によっては取り壊される寸前に「再発見」され、地域住民を中心とした関係者の働きかけによって復活したという経緯を持つものもある。

これらの芝居小屋は、近年開場した現代的な劇場や文化ホールと同じように、演劇などの文化的コンテンツを上演する役割を担っているのみならず、現代の劇場とは異なる意味を持っていると思われる。それは、芝居小屋が長い歴史をもち、劇場が所在する地域社会と密接に関連しながら現在も利用されている点に現れている。その一方で、最盛期の明治後半から大正期には全国で数千あったともいわれる芝居小屋は(徳永、2011:56)、現在20館程度しか現存していない。多くの芝居小屋が地域社会の変化、人々の変化のなかで消えていったことになる。

この経過を地域社会の側からみれば、かつてほとんどの地方都市には芝居小屋があり、そしてそのほとんどが失われたことになる。なぜ芝居小屋は失われたのか。本研究では芝居小屋を「明治初期から昭和初期に日本各地に設置され、その当初の目的が芝居(演劇)上演のための劇場」と定義し、現在は芝居小屋がない地方都市を事例に、芝居小屋の盛衰過程を取り上げることで、近代化のなかで芝居小

屋そして劇場がどのように役割を変化させ、現在の状況に至ったのかを明らかにする。

II. 盛岡における芝居小屋の盛衰過程¹

1. 盛岡の芝居小屋：本論の焦点

芝居小屋に関する多くの研究を行う徳永高志は、江戸期から明治期への劇場統制の変化について、明治に入り芸能が「自由化」²されるなかで新たな劇場の建設が徐々に進み、次第に大都市から地方都市へ広がっていったことを指摘している。特に、「盛岡、金沢、松山、高知、熊本など、近世以来の城下町では、1880年前後までに、新たに屋根客席付の大劇場³が建設された」(徳永、2000:32)と述べており、これらの城下町では、1880年、つまり明治13年前後までに「芝居小屋」が建設されたという。

ここで徳永があげている5つの城下町を、別の論文で徳永自身があげた「現存する芝居小屋」(徳永、2010)(表1)と照らしあわせてみると、松山や熊本には県内別所に現存する芝居小屋があるものの、どの地方都市においても明治初頭にあった芝居小屋はすでに失われていることがわかる。岩手県盛岡市もそのひとつであるが、市内にあったと徳永が指摘する芝居小屋については、資料等がほとんどないのが実状である。

¹ 本節で触れる盛岡の地理、明治期に設置された芝居小屋等の位置の概要は、その後の情報とともに図3に示している。

² 江戸期とは異なる形で明治以降も政府の統制は継続しており(演劇内容に関する統制など)、ここで徳永がいう「自由化」は、公認される劇場の数が増え、劇場経営の近代化が進んだことを意味している(徳永、2010:22-45)。

³ 元々「芝居」という言葉は、芝が生えている場所つまり屋根のない状態の客席に由来する。明治以前の芝居小屋は、客席が仮設で屋根がない場合も多く規模も相対的に小さかった。江戸初期には江戸や京、大坂などの官許の芝居小屋ですらまだ客席に屋根はなかったという(服部、2007:243)。

表1. 現存する芝居小屋

劇場名	所在地	成立年代	所有者
康楽館	秋田県鹿角郡小坂町	1910年	小坂町
(旧)広瀬座(福島市民家園)	福島県福島市	1887年	福島市
(旧)共楽館	茨城県日立市	1917年	日立市
ながめ余興場	群馬県みどり市	1937年	みどり市
鳳凰座	岐阜県下呂市	1883年頃	下呂市御厩野区
白雲座	岐阜県下呂市	1890年	下呂市門和左 白山神社
明治座 (現在は「かしも明治座」)	岐阜県中津川市	1894年	所有: 明治座保存会 管理: 中津川市
常盤座	岐阜県中津川市	1891年	中津川市
東座	岐阜県加茂郡白川町	1889年舞台 1900年客席	東座芸能保存会
村国座	岐阜県各務原市	1877年	所有: 各務区 管理: 各務区, 各務原市
相生座	岐阜県瑞浪市	1890年頃	(株)日吉ハイランド
呉服座	愛知県犬山市	1892年頃	(株)明治村
永楽館	兵庫県豊岡市	1900年	豊岡市
翁座	広島県府中市	1923年	個人所有
旧金毘羅大芝居(金丸座)	香川県仲多度郡琴平町	1835年	琴平町
脇町劇場(オデオン座)	徳島県美馬市	1933年	美馬市
貞光劇場	徳島県美馬郡つるぎ町	1932年	個人所有
内子座	愛媛県喜多郡内子町	1916年	内子町
嘉穂劇場	福岡県飯塚市	1931年	NPO 法人嘉穂劇場
八千代座	熊本県山鹿市	1910年	山鹿市

(註)戦前に建設された劇場で現在も劇場として使用されているか、使用をめざすうごきがある和風劇場を挙げた。

出典 徳永高志(2010)『公共文化施設の歴史と展望』p.10

しかし、現在盛岡市内には現代的劇場、文化ホールは多数所在している⁴。明治初頭にあったという芝居小屋は、以降の盛岡の近代化の流れのなかで閉館し、また別の劇場が誕生し、それを繰り返して現在に至ったのであろう。前述したように、この経過を理解することは、現在も利用され続ける各地の芝居小屋が果たしている社会的な役割を検討する際に、重要な知見を与えると思われる。特に、盛岡には大正期に建てられ平成に入ってから再建された「盛岡劇場」があるが、このように現在利用されている劇場は、どのような経緯で明治以降の芝居小屋と役割を交代し、現在に至るのであろうか。本研究では、盛岡市内の消えていった「芝居小屋」、そして形を変え残った劇場の経緯をそれぞれ理解することで、芝居小屋の役割を考えてみたい。

2. 盛岡の近代

ここで簡単に、明治以降の岩手県盛岡市の概要を紹介する。盛岡は北上川、中津川の合流地点にある南部藩の盛岡城を中心とする城下町として発展してきた。明治維新の際に盛岡藩は周辺の他藩と同盟を結んで戊辰戦争で官軍と戦い、降伏した。明治初頭のうちに城郭は取り壊されて現在は石垣のみが残る。市内を流れる中津川を挟んで城と八幡神社の間が、江戸期以来の庶民の生活地区の中心であり「河南」と呼ばれた。明治に入って、中津川の北側にあたる城趾の周辺に県庁や盛岡市役所、警察、裁判所などができ、また、江戸期には士族の居住地であった周辺の地区も商業地域として発展し、「河北」と呼ばれた。市街の西側に東北本線が開通した明治中期以降、街は拡大し現在の盛岡の中心部が形成されていった。

盛岡の芝居小屋の状況を考える上で、この時期(明治初頭から大正期)に起きた重要な出来事を確認すると(表2)、

⁴ 盛岡市内の演劇などの舞台芸術は、現在岩手県民会館、盛岡市民文化ホールなど、公共の文化ホールがその中心を担っている。

表2. 明治～大正期の盛岡市の主な出来事

明治 17(1884)年	河南地区の大火 下ノ橋付近から出火し八幡町まで焼失
明治 22(1889)年	市制施行 市街地の中心は河南地区(呉服町、紺屋町など) 官公庁、中央出先機関などが所在する消費都市的な特徴
明治 23(1890)年	人口3万2千人 東北本線盛岡まで開通 駅前の市街地化始まる 市内各所の士族居住地区も商業地域に
明治 35(1902)年	盛岡高等農林学校開設
明治 38(1905)年	盛岡市内に初めて電灯がつく(190 世帯)
大正2(1913)年	人口4万3千人

まず、芸能も含めた庶民の生活の場であった河南地区で、明治 17 (1884) 年に大きな火事が起き、広い地域が焼失したことがあげられる。民家のみならず商店や、寄席⁵などの多くも、この大火によって焼失したという。表3は明治 10 年代頃に市内にあった寄席、芝居小屋である。次節で述べ

表3. 盛岡(明治 10～30 年頃)の寄席・芝居小屋等(新聞広告等による)

名称(俗称)	所在地(当時)	新聞掲載年月(明治)
賑富座 (内丸・常舞台)	内丸・盛岡公園裏地	14 年 1 月
(芝居小屋・寄席)	茅町	21 年 1 月
永楽座	馬町	14 年 2 月 持主 赤沢虎治
曲三亭	鍛冶町	12 年 8 月 持主 藤沢三治
芝居小屋	内加賀野	10 年 9 月
坂ノ上・定舞台	八幡坂上	14 年 7 月
開新亭 (芝居小屋)	生姜町	23 年 1 月
芝居小屋 (瀨川小屋)	餌差小路 (瀨川安五郎邸跡)	18 年 (明治 21 年撤去)
神明座	生姜町	17 年 10 月
小川亭	十三日町	22 年 1 月
杜陵館	神明町	18 年 11 月 (盛岡市民集会所)

注・日進新聞・岩手日日新聞等による。

明治 17 年 9 月河南大火によって変動があった。

出典『図説盛岡四百年 下巻Ⅱ』p.240 を一部改変

⁵ ここでいう寄席とは、江戸期以降各地にあった興行場で、芝居(歌舞伎)以外の、落語、浄瑠璃、手品、音曲などの興行を行った。江戸幕府は芸能統制の必要から、芝居とその他の芸能を明確に区分し、それぞれ上演する場所なども分かれていた。

る通り盛岡は江戸期から庶民芸能が盛んで、河南地区には数多くの寄席演芸場があり、大衆芸能として芝居や義太夫、端唄などが演じられていたといわれている。その後の存廃ははっきりしないものがほとんどだが、所在地からみると(内丸、茅町以外はすべて河南地区)、これらの多くもこの時焼失したと推定される。

明治 22 (1889) 年に市制が施行され盛岡市が誕生、翌年東北本線が盛岡まで開通し、近代的な市街地の形成が始まった。明治政府が進めるのは確かに富国強兵政策であったわけだが、しかし、この時期の盛岡の発展過程をみると、盛岡の発展要因は商業であり工場なども少なく、産業構造としては零細小規模企業が中心であった。特定の産業が経済的発展、近代化を急激に推し進めたというわけではないことが読み取れる。明治後半から大正期は、岩手県の基盤産業である農業は凶作続きで大きな打撃を受け、県全体そして県庁所在地とはいえ地方都市である盛岡の人々の生活は厳しいものだったことがうかがえる。

3. 盛岡の芝居小屋の盛衰

(1) 明治前期の盛岡における芝居小屋

前節でみたように、盛岡の近代は決して豊かなものではなかったわけではなく、そのような状態であるこの時期に、徳永がいう「大劇場」が本当にあったのだろうか。

現在でも盛岡では「ここは江戸期以来、芸事が好まれる土地柄」であるという。江戸初期から藩主が芝居を好んで芝居小屋や役者を擁護していたこと⁶や、現在も「芸者文化」があること⁷などが、その背景にあると思われる。明治初頭の盛岡における芝居小屋について、地域史等のこれまでの知見を集めても情報は非常に少なく不明な点が多い。わず

⁶ 『盛岡市史 第5分冊』(p.67)によると、17世紀後半の第5代藩主南部行信は芝居を好み、河南地区の八幡丁(町)に常設芝居小屋を許可したり、江戸などから役者を招いたりしたという。

⁷ 盛岡では現在も盛岡芸者と呼ばれる芸者衆が活動している。明治以降第二次世界大戦前まで、河南地区の幡街芸者、河北地区の本街芸者が芸を競い、最大で合計 150 名、あるいは 200 名ともいわれるほどの芸者が市内にいたという(『図説盛岡四百年 下巻Ⅱ』p.320、『盛岡市の歴史 下』p.55)。

かに記述のある『盛岡市史』によると⁸、明治初年に河南地区の八幡町、また中心地からやや離れた内加賀野にも芝居小屋があったという。また、同じく河南地区の馬町には永楽座という芝居小屋があり娯楽の中心だったが、先述の明治17年の大火で焼失したことが記載されている。

さらに同書には、明治10(1877)年に内丸座が建てられたという記述がみられる⁹。また、別の文献では、明治12(1879)年に河北地区の内丸に開場した賑富座が、のちに内丸座になったという(『盛岡劇場ものがたり』p.60)。当時の新聞を見ると(日進新聞明治12年6月17日付)、「八幡町や加賀野の芝居小屋と違って立派な賑富座が内丸にできた」ことが記事として掲載されている。以上のことから「内丸座」と「賑富座」の関係は判然とししないもの¹⁰、明治10年代前半の河北地区内丸周辺に芝居小屋があったことは間違いないと思われる。この日進新聞によれば、賑富座では「田舎千両¹¹佐の川咲の助らが曾我物語を興行した」とあることから、この芝居小屋の最初の演目(こけら落とし)は、芝居(歌舞伎)であったことがわかる。芝居小屋の建築的な特徴等ははっきりしないが、歌舞伎の代表的な演目である曾我物語を上演する程度の芝居小屋が、この時期の盛岡にあったということになるだろう¹²。

これに対し、河南地区の芝居小屋のその後の状況は不明

⁸ 詳しくは『盛岡市史 第12分冊』p.116。

⁹ 『図説盛岡四百年 下巻Ⅱ』(p.238)では、「明治10年に盛岡公園内に定舞台の賑富座があった」と記述されている。

¹⁰ 一方で、盛内政志が映画館の歴史をまとめた『盛岡映画今昔』では、内丸座について、活動常設館以前の資料は残っていないとしつつ、「(内丸座経営者の)吉田佐太郎氏は、もともと、芝居小屋だった藤澤座の中茶屋をやっていたといわれるが、その後独立し、大手先通り(内丸付近の地名:小野澤注)にあった町道場の建物を利用して、芝居小屋を開設した」と記述している(p.64)。ここでは賑富座との関係は述べられていない。また、『新版 岩手百科事典』の「演劇鑑賞」項目でも、「内丸座はそれより(明治28(1895)年の藤澤座の新築:小野澤注)数年遅れででき、明治40年代に歌舞伎興行をしたことが述べられている(p.83)。賑富座が内丸座の前身であるか否かは、それぞれの記述があり詳細は不明である。

¹¹ このこけら落としの時招聘した「田舎千両」の役者とは、「田舎」が示す通り、東京や大阪の大歌舞伎の役者ではなかったと思われる。

¹² 河南地区が壊滅状態になったといわれる明治17年の大火の際、河北地区にある賑富座は舞台を休演して罹災者を救済し避難所として開放したという(『盛岡劇場ものがたり』p.55)。

である。先述の明治17年の大火により、芝居小屋の建物もさまざまな記録も失われてしまったことが考えられる。河北地区が明治維新後の近代的な発展のなかで新たな芸能文化の歴史を作り始めたのに対し、江戸から続く盛岡の芝居小屋の歴史はこの明治17年でリセットされたといえるのかもしれない。

(2)二座の全盛時代

その後、盛岡の芝居小屋についての記録がはっきりと残るのは、明治の後半になってからのことである。この時期の盛岡の演芸場(芝居小屋)のあゆみについてまとめている『盛岡劇場ものがたり』によると、「この内丸の賑富座、のちの内丸座と、この藤沢座という盛岡の河北、河南の両座は、時代を反映し、(中略)日清日露戦の勝利に沸いた明治30、40年代の両座全盛時代」(p.60)があったという。

先に述べた通り、明治12(1879)年に開業した賑富座が内丸座になったとするこの経緯は判然とせず、明治20年代初めには「内丸座」があったという指摘もあるが(『図説盛岡四百年 下巻Ⅱ』p.238)¹³、明治40年代には内丸座での歌舞伎興行の広告もあり、少なくとも明治後半には盛んに芝居小屋として利用されていたことがわかる。また、盛岡で活動写真(映画)が最初に上映されたのは明治33(1900)年といわれ、その後大正4(1915)年には専門の映画館が盛岡にも誕生する¹⁴。内丸座のような芝居小屋でも、歌舞伎以外の見せ物や映画の上映も行っていた。この頃の娯楽の志向は大きく変化しており、内丸座は大正5(1916)年頃に映画を専門に上映する映画館になり、芝居小屋としての役割を終えている。この内丸座は、その後何度も名前を

¹³ 他の資料にも、内丸座は演劇興行を目的に設立され、大正の初め頃から映画館となったという記録が残る(『盛岡の歩み 市制施行80周年記念』p.195)。

¹⁴ 盛岡の初めての活動写真(映画)上映については、演目、開場など詳細は不明であるが、最初の映画専門館は河南地区にできた記念館であった(『盛岡の歩み 市制施行80周年記念』p.194、『盛岡市の歴史 下』p.121)。これらは、東京での映画の動向から数年~10年程度遅れていたに過ぎず、当時の映画の普及の早さがうかがわれる。

棟上と顔見世 前號に記せぬ如く一昨日の役者一同市内を廻りたる未午後一時より藤澤座の棟上式を行ひしに表口には敷席の轆と無数の提焼旗吊して景氣を附け夫れより餅撒をかせしに好天氣に加ふるに休日のごとく見物人の群集一方からざりしと又同日は顔見世として木戸大五錢小三錢にて樹機敷料を飾りして前號記載の外題を演せしに老幼男女の入場夥しく所謂大入りにてありしと其評判は座頭の尾上鶴太郎女形座頭の嵐璃幸及佐々木義綱を演せし大谷友紫の三名の中々好評あり一休演藝は「ハネル」方なれば當時に取りての好かる方あるも役者は少々不足の様見受けらる又舞台も間が狹たも機敷等と充分なれば見物人も相應に容るゝに足るべく兎に角宜敷方ありと云ふ

図1. 藤澤座開場を伝える新聞記事

(岩手広報 明治28(1895)年10月19日)



図2. 藤澤座

出典 『図説盛岡四百年 下巻II』p.239

変えながら存続し平成8(1996)年に閉館¹⁵するまで、映画館としての役割を果たした。

一方、河南地区の藤澤座はどのような芝居小屋だったのか。経営者藤澤三治は当時の盛岡で活躍した実業家で、芝居小屋経営の以前から寄席「曲三亭」(表3参照)を経営し興行を行い(この寄席は明治17年の大火でも焼け残っていた)、また個人事業主として市内開発のために北上川に開運橋をかけたり(私橋のため当初通行料金を取っていた)と、さまざまな領域で活躍した人物である¹⁶。この藤澤が座主となって、明治28(1895)年、河北地区紺屋町に藤澤座が開場した。東京根津栄座の一座を招いて歌舞伎の上演をした開場初日の様子を伝える新聞、岩手広報によると(明治28(1895)年10月19日付「棟上と顔見世」、図1)、老幼男女の入場夥しく大入りとなったという。当時の写真によると(図2)、入り口前に轆が立ち伝統的な雰囲気もあるが(内部は機敷席などがあり和風の作りであった)、建物の外

観自体は洋風である¹⁷。この芝居小屋の当時の評価は、同じ岩手広報同年12月27日付の記事「下足場の活劇」によると、「紺屋町の新劇場藤澤座はその規模狭小なるは云うまでもなきことながら、その造作といい体裁といい頗る垢抜けのした小ジンマリしたるの出来栄にて、当市にあつては先ずは相応の劇場と云つて可なる次第」であるという¹⁸。舞台開き興行の新聞広告を見ると、木戸錢の他に、お茶や弁当、寿司、酒、菓子、火鉢や座布団などの値段も記載されており、充実した芝居鑑賞ができる芝居小屋だったことがうかがえる。大正2(1913)年には、東京大歌舞伎で当時人気の五世中村歌右衛門(明治20(1887)年初めての天覧歌舞伎にも出演した名優)一座の公演も行われている。

¹⁵ 内丸座は、昭和42(1967)年から閉館まで映画館「SY内丸」として盛岡市民に親しまれた。現在跡地にはマンションが建ち当時の様子はうかがえない。

¹⁶ 明治12(1879)年9月の日進新聞には、藤澤が興行する相撲の広告が掲載されている。また、藤澤は明治17年の大火以降、消防連合を組織しその頭取を務めたという(『図説盛岡四百年 下巻II』p.239)。

¹⁷ この後、昭和12(1937)年、藤澤座は外見も和風の「衆楽座」に建て替えられている。藤澤座が純和風に回帰したのは、建て替え時に東京の歌舞伎座を模したからである。明治22(1889)年に建てられた初代の歌舞伎座も当初は外観が洋風、内部が和風であったのが、明治末期の大改築の際に純日本式に作り替えられたのである。明治中期以降、歌舞伎は劇場も含め保守化(古典芸能化)していった(小根山ら、1995:397)。現在建設中の五代目の歌舞伎座も(内部は椅子席であるが)、外観は和風となる予定である。

¹⁸ この記事は、藤澤座での芝居が終わった後の下足番(伝統的芝居小屋では入り口で履物を脱いで入る)と観客の書生らしき男のやりとりをとりあげ、藤澤座が相応の出来なのに、下足番の気が利かずあたかも昔の役人のように客に横柄な態度で「これらの弊害は当座の為に多いに惜しむ所なり」と述べている。



- ①内丸座
- ②藤澤座
- ③盛岡劇場
- ④岩手県公会堂
- ⑤岩手県民会館

注
 ・①、②は現存していない
 ・賑富座の位置は不詳（内丸座の前身である可能性有）

図3. 現在の盛岡市中心部と芝居小屋・劇場等の位置

その後、音楽会や見せ物興行なども行いながら、芝居の上演を続けた藤澤座だったが、明治35（1902）年には、国会議員選挙に初めて立候補した、後の内閣総理大臣原敬の演説会も開催しているという（『盛岡劇場ものがたり』p.56）。内丸座の変遷からもわかる通り、藤澤座も映画を含めた多様な文化活動の場として利用され、「多目的ホール」としての役割を果たしていたことがわかる。後述する盛岡劇場の開場（大正2（1913）年）後には客足を奪われ、大正期には一時期名前も変わって映画専門館となるが、藤澤座に戻る。昭和5（1930）年に映画常設館となった後に名前も変わり、さらにその後火災で全焼、建て替え、さらに休館状態になるなどの変遷を経て（一時は芝居小屋としても利用された）、昭和48（1973）年まで、映画館としての営業を続けた¹⁹。

明治30年代の「両座の時代」、人々が芝居小屋をどのように利用し楽しんでいたのかは、当時の人々の記録に断片

的に残されている。そのひとつを紹介する。戦後初めての選挙で当選し昭和22（1947）年から盛岡市長を務めた小泉多三郎²⁰が残した日記（明治35（1902）年1月から3月まで）がまとめられている（森、2011）。現在の花巻市に生まれた小泉はこの年19歳で盛岡中学4年に在籍していたが、その3ヶ月の間に内丸座、藤澤座にて芝居をみた記述が数度あり（1月24日（金）、3月2日（日）、3月23日（日）など）、学期末試験前の2月8日（土）には「又もや芝居を見る、甚だ愉快千万、試験まではつつむ（慎む：小野澤注）べし」とさえ書いている。その他にもはっきりとしないが「内丸を見物又深美なるかな」（1月26日（日））、「瀬川（友人の一人と思われる：小野澤注）と藤沢」（2月14日（金））など、芝居見物をうかがわせる記述もある。また、芝居の演目と思われる「幡随院長兵衛を見る」（1月14日（火））、「四谷怪談を見て慄然たり」（3月27日（木））な

¹⁹ 藤澤座は、昭和16（1941）年に「国民劇場」と名称を変更し、閉館まで親しまれた（昭和39（1964）年からは「盛岡国民劇場」）。内丸座と同様に跡地には現在マンションが建ち静かな町並みで、芝居小屋や映画館があったことはまったくうかがいしれない。

²⁰ 小泉多三郎は盛岡高等農林学校林科卒業後、同校教授、その後林業関係の会社を経営し、また市会議員、盛岡商工会議所会頭なども務めた人物で、盛岡で映画館を経営する株式会社中央映画劇場（昭和10（1935）年創立）の社長でもあった。官界・教育・実業・地方自治とその活躍舞台は広く、かつスポーツマンで多趣味な人であったという（『いわて人物ごよみ』p.224）。

どもあり²¹、そのほとんどが級友との行動であることがうかがわれる。当時の若者にとって芝居小屋が、頻繁に足を運ぶ魅力的な場所であったことがわかる²²。

また、宮澤賢治は盛岡中学に入学した明治42（1909）年から盛岡高等農林学校研究生を修了する大正9（1920）年まで盛岡にいたが、その間に盛岡で内丸座、藤澤座などの芝居小屋に行ったというはっきりとした記録は見いだせない²³。文学のみならず音楽や演劇にも強い興味を持っていた賢治だが、高等農林主席入学、級長を務めるような真面目な学生・賢治にとって芝居小屋は足を踏み入れがたい悪所であったのかもしれない。

以上のように、明治10年代以降に盛岡にあった芝居小屋の変化の過程をみてきた。明治前半の状況ははっきりしないが、明治中期以降にはいくつかの芝居小屋が芝居を中心に、各種演芸、音楽会、演説会など、多様な目的に利用され、芝居小屋としての役割を果たしていた。そして大正期以降映画専門館となり、その後昭和の好不調を経て平成の始めまでに姿を消していた。芝居小屋はもちろんその後継である映画館の存在さえ、現在ではつかみにくい状況とな

21 「幡随院長兵衛」は河竹黙阿弥作明治14（1881）年初演の「極附幡随長兵衛」の別名である。また、「四谷怪談」は歌舞伎としては江戸期文政年間の四世鶴屋南北作「東海道四谷怪談」が現在まで上演される著名な演目だが、明治期に活躍した落語家初代三遊亭圓朝の創作落語もあり（ただし、圓朝自身はこの数年前に亡くなっているが）、小泉が具体的にどのような形の「四谷怪談を見た」のかは、はっきりしない。

22 ただし、小泉は盛岡中学では石川啄木と同学年であるが（啄木は明治35（1902）年10月退学）、啄木の名は日記には出てこない。約100年前の若者たちも現在と同じ趣味の合う小グループに分かれそれぞれ異なる学生生活を送っていて、小泉は特に芝居好きだったのかもしれない。次の宮澤賢治の動向も、同様なことを示唆していると思われる。

23 盛岡での宮澤賢治の観劇については、次節で述べる盛岡劇場に行ったことが数人の友人の回想からわかっている。芝居好きであったことは間違いないようで、花巻農学校の教員時代（大正12（1923）年5月頃）の話として、賢治は仕事が終わってから汽車で盛岡に来て盛岡劇場で観劇し、午後10時の終演後、お金がなかったので徒歩で花巻まで帰り朝7時到着、そのまま翌日の勤務にでた、という同僚の談話が残っている（『盛岡劇場ものがたり』p.123、『【新】校本宮澤賢治全集 第16巻（下）補遺・資料 年譜篇』p.256）。盛岡-花巻間は40km以上ある。また、年譜を見ると、賢治の人生で9度あったといわれる上京中には、明治座、歌舞伎座、築地小劇場、新橋演舞場などで、歌舞伎や新派劇などを何度も観ていることがわかる。

っている。本稿ではそのような芝居小屋2つの経過を紹介したが、明治期の盛岡の文化活動等に関する資料によると、少なくともある程度の期間にわたって興行した芝居小屋はこの他には確認できなかった。

これらの消えていった芝居小屋に対し、盛岡市内には大正期に初代が設立された「盛岡劇場」というもうひとつの劇場が現存する。現在の盛岡劇場は建物としては2代目で、初代とは形を変え近代的な劇場ではあるが、現在も演劇を上演する劇場として利用され、盛岡における演劇上演の中心的存在である。盛岡劇場はどのような過程を経てこのような現在の姿に至るのかを次にみていくことにする。

III. 「盛岡劇場」の設立と再建

盛岡劇場は河南地区にある劇場で、現在は盛岡市の公共ホールとして市民に親しまれている²⁴。現在の盛岡劇場が再建された際に、それまでの経緯等をまとめた文献『盛岡劇場ものがたり』（1996年）が発行されており、この文献を中心にして盛岡劇場の設立からの経緯をまとめる。

1. 最初の盛岡劇場

(1) 設立の経緯

盛岡劇場が立地するのは現在松尾町と呼ばれる地区で、江戸期以来の庶民生活の場である河南地区の中心地であった呉服町、生姜町（現在の中ノ橋通、肴町周辺）からは少し離れた場所になる（図3）。明治43（1910）年の盛岡市内の地図を見ても、河北地区の内丸座、河南地区紺屋町の藤澤座は地図上に記載が見えるものの、盛岡劇場の建設されるあたりは八幡神社と呉服町のちょうど中間の、田畑の広がっている地域である。盛岡劇場は、ここで実施された盛岡で初めての大規模宅地開発事業であり産業発展事業の目玉として、民間主導で計画されたものであった²⁵。

すでに述べたように、明治22（1889）年の市制施行後、

24 現在は財団法人盛岡市文化振興事業団の運営となっている。

25 『盛岡 明治大正昭和「事始め百話」』では、以下に述べる新馬町の事業を盛岡での「市街開発第一号」として紹介している（pp.34-36）。

翌年の盛岡駅開業、明治38(1905)年には電灯が市内に普及し始め、明治後半の盛岡は急激な発展をみた。頻繁に起きる火事や水害²⁶などの災害もあり、江戸期からの盛岡の市街の構造は多くの課題を抱え、新たな市街地の形成が必要となっていた。

盛岡劇場が建つ地域の当時の地名は「新馬町」と命名された。この地名は、劇場が作られる地域に、河南地区の馬町(江戸期からの芝居小屋、永楽座(明治17年大火で焼失)があった町である)にあった馬検場を移転する計画に由来する。

江戸期より馬の産地として有名であった岩手県そして盛岡では、馬の生産に関わる産業は非常に重要なものであった。特に馬町は、明治に入って政府所管の養馬係出張所など馬の生産に関係する機関、業者などが集中し、特に馬の競りを行う馬検場周辺は大変に賑わっていたという。日清、日露戦争のための軍馬の生産によって、さらに「馬町一帯は人と馬でごった返し」(『盛岡市の歴史 下』p.93)、馬検場の移転が必要となった。この移転には紆余曲折があったようだが²⁷、結果的に新馬町を民間主導で開発し、新たな市街地を形成して河南地区を拡大発展させるために「盛岡土地建物株式会社」が作られ²⁸、その主導のもと馬検場は明治45(1912)年、新馬町に移転した²⁹。

こうして、新馬町周辺は宅地造成などの開発が始まり、その過程で町内に劇場を建設することになったが、それは河南地区の発展を期待する周辺の実業家(八幡町の料亭の

主人など)ら有力者の働きかけによるものであった。彼らは出資して「盛岡劇場株式会社」を設立し、劇場建築と運営を行うこととなった。最初の社長は菊池美尚で、市議員や当時の盛岡銀行、岩手銀行等の頭取などを務め、馬検場を経営する岩手県盛岡産馬組合の組合長であり、盛岡土地建物株式会社の社長でもあった。株主は有力者が中心ではあったが、一株株主にはたくさんの芸者も加わっており、地域の活性化に多くの人たちが期待を寄せていたことがうかがえる。

(2)初代盛岡劇場の概要

このように盛岡劇場は、都市開発の一環としての役割を期待され設立された。劇場としてのハード面は、明治44(1911)年に開場したばかりで当時最先端の劇場といわれた東京帝国劇場³⁰をモデルとして設計・建設された。帝国劇場は鉄骨建築で1,700人収容する劇場であったが(すべて椅子席)、盛岡劇場は盛岡では初めての3階建てで木造、外観は洋風、客席のほとんどが椅子席ではなく土間に座る席で、また電気による照明が設置され、舞台装置としては歌舞伎上演に必要な回り舞台や花道もあった。客席数は1、2階で800席前後と試算されその内の64席だけが椅子席、3階には立ち見席もあり観客数は確定できないが200人以上の収容ができたというから、全体では1,000名程度の劇場ということになる³¹。外部のデザインも当時の盛岡では

²⁶ 盛岡は川に囲まれた地形のため、頻繁に洪水被害を受けている。なかでも盛岡劇場開設直前の明治43(1910)年9月の豪雨によって中津川が氾濫した際には、河南と河北をつなぐ上ノ橋や下ノ橋などを含む市内の主要な橋がほとんど落橋し、周辺の他の川でも橋が流失したという。死者も出ており約3,000戸の家が流失、浸水したという(『盛岡市の歴史 下』pp.95-97)。

²⁷ これについては、馬検場を運営していた岩手県盛岡産馬組合内でさまざまな経緯があったことが『盛岡劇場ものがたり』(pp.45-47)に詳述されている。

²⁸ 盛岡土地建物株式会社の役員には、村井源三、村井源之助、川村徳助など、現在も当地に続く老舗企業の当時の経営者たちの名前がみられる。

²⁹ 新馬町に移転した馬検場はその後岩手の馬産の中心的役割を担い、大正後期には岩手県の馬生産数は日本一になったという。馬検場の建物の一部は松尾町に現存している(「いわての文化情報大事典」ウェブサイト「歴史文化」より)。

³⁰ 最初の帝国劇場は明治44(1911)年に東京丸の内にてきた、日本で最初の本格的な西洋劇場で、設立を進めた委員会の委員長は渋沢栄一であった。演劇そのものの近代化を目指した演劇改良運動と連動し「純洋風劇場」(『江戸東京学事典』(三省堂)p.834)といわれるが、歌舞伎上演のための装置を有し、実際には歌舞伎などの伝統的な演目も西洋的な演劇も、どちらも上演できる劇場であった。帝劇を設計した横河民輔は「私は廻り舞台も花道も用いたく無かったのだが、劇場の方の要求でそれに従うことにした」「日本人は、ああいう場所(劇場：小野澤注)に行くとき飲食しなくては承知ができない風習になっているから、そこで余儀なく食堂という事になった」などと、和洋折衷の設計をせざるを得なかったことに不満を感じていた様である(小林ら、1996:454)。このことからすると、盛岡劇場が最新を目指しつつ、大歌舞伎の上演ができ一部を除いて伝統的な拵席を用いたことも理解できる。

³¹ ただし、この頃の劇場はどことも定員を大きく上回る観客を入場させていた。椅子席ではなく土間(拵席)であれば明確な収容員数は事実上意味のないものだったのだろう。当時盛岡劇場では定員の3倍以上を入れたこともあったといい、2、3階の客席から客

目を引く白を基調とした西洋風で、設計は東京駅駅舎や現在の岩手銀行中ノ橋支店を設計した辰野・葛西事務所が担当し、直接には岩手出身の葛西万司がデザインしたといわれている（図4）。また、館内には洋式、和式の食堂、絵はがき販売店なども併設されていた。

劇場の運営自体も新しい時代の方法を取り入れている。当時の開場広告によると³²、営業方針は「従来の弊風を排し、切符制度と致し、各等とも一定の観覧料の外（中略）一厘たりとも申受不申候」、「一等より五等まで当会社養成の女案内員を専属せしめ、（中略）出来る限り観覧者の御便宜を相図り可申候」と、それまでの、芝居茶屋を通して客席を予約し当日の案内や食事セットで利用する茶屋制度ではなく、近代的なチケット制を取った。また、こけら落としの演目も、モデルとした帝劇所属の当時大歌舞伎の人気俳優七世松本幸四郎の一座が、歌舞伎の代表的な演目である勧進帳を演じるという華々しさであった。

当時このような最先端の劇場を盛岡で建設し運営することには、大変な困難があったと思われるが、盛岡劇場株式会社の役員たちは何度も東京へ足を運び、さまざまな情報を収集し準備したとのことである。

(3)盛岡劇場の開場とその後

大正2（1913）年9月23日、盛岡劇場は開場した。前日盛岡駅に着いた幸四郎一座を、関係者とともに本街・幡街両地区の芸者衆が出迎え、また市民多数が取り囲み、10日間の興行はほとんど満員の客が詰めかけた。その後も、東京や大阪の大歌舞伎興行、川上貞奴（マダム貞奴）ら新派劇の上演、地元の芸者衆の温習会（踊りなどのおさらい会）、西洋音楽のコンサート、演芸、浪曲、舞踊、そして活動写



図4. 盛岡劇場（初代）

出典 『図説盛岡四百年 下巻II』p.241

真など、さまざまな文化活動の場として利用された。演説会や講演会などの利用もあった。

盛岡劇場でも開場当初から活動写真（映画）の上映は始まっていたが、『盛岡劇場ものがたり』に掲載された主な上演内容の記録によると、「活動写真」の上映は最初の数年間に数えるほどしかみあたらない。大正8（1919）年には、洋画の上映がみられるが、すでに述べた通りその頃には元々の芝居小屋が映画上映館に変わり、また市内には新規の映画専門館もできており、盛岡劇場での映画の上映が増加しているわけではないことがわかる。翌年盛岡劇場に隣接して映画専門館が開設されたことも、映画上映数がそれほど増加していないことの原因であろう³³。

このような利用状況は昭和10年代まで続いている。太平洋戦争開戦後には戦前に行われていた多様な演芸は減少し、昭和18（1943）年は6興行、昭和19（1944）年でも3興行の歌舞伎上演が記録されているなど、戦争末期には歌舞伎公演が多くなっているようである³⁴。戦争中最後の上演記

が身を乗り出し落ちそうな程だったという（『盛岡劇場ものがたり』p.149）。大正7（1918）年発行の「盛岡案内」では、盛岡劇場は「東北一の劇場なりとの評あり。（中略）観覧席は2,500名を容るに足りる」とある（『図説盛岡四百年 下巻II』p.246）。

³² この第一回開演広告には、幸四郎一座のこけら落としの歌舞伎の演者、演目の紹介のみならず、ここに引用した営業方針の他、設備、電灯、大道具などについて詳細に記載し、開場時（演目終了後）には非常門を開けて迅速に履物の対応をすることが可能であることなども書かれている（『盛岡劇場ものがたり』p.64）。

³³ 盛岡劇場株式会社の社長だった川村留吉が、映画の興行会社を設立し、大正9（1920）年盛岡劇場の隣に「三笠映画劇場」を開館した（『盛岡劇場ものがたり』p.77、p.119）。川村は明治8（1875）年東京生まれの元旅回りの役者で、当時八幡町で料亭を営んでいた（『盛岡映画今昔』p.131-132）。

³⁴ 戦時中の大歌舞伎は慰問興行（巡業）が仕事だったという（中川、2009：18）。地方への巡業が増加した背景としては、戦時統制による都市部の劇場の一部閉鎖や空襲による焼失、演劇の検閲は都市部を中心に実施されていたが戦時下に相応しい演目を新作することが古典芸能である歌舞伎には簡単ではなかったこと、昭和初期から都市部の娯楽は多様化し歌舞伎人気は下降ぎみだったこ

録は、昭和 19 (1944) 年 11 月、名優と名高い東京大歌舞伎の六世尾上菊五郎一座が行った代表的な義太夫狂言「菅原伝授手習鑑」の興行で、『盛岡劇場ものがたり』には昭和 20 (1945) 年の上演記録がひとつも掲載されていない³⁵。戦時中は一時軍需品の倉庫として利用されていたという(『盛岡市史 第 12 分冊』p.117)。

このように盛岡劇場は開場以来さまざまな目的で利用されてきた。上述の通り、開業当時としては充実した設備を備え、最新のサービス形態でもあり、また東京や大阪と同じ芝居を見ることができたことがわかる。しかし、それだけに盛岡劇場の入場料は破格の高額であった。満員の観客を集める興行もあり開場当初は黒字であったが、料金が高額のことでもあってか客が入らない公演もあったという³⁶。その結果、必ずしも採算性とは両立せず、赤字経営が続いて経営陣の交代も生じた。特に、商業地区が盛岡駅方面に拡大し河北地区が徐々に市街地の中心となりつつあった市内内丸に、大ホール(固定席 1,000 席)を備えた岩手県公会堂が開館した昭和 2 (1927) 年以降、盛岡劇場の経営はさらに厳しくなった。

岩手県公会堂はアール・デコ洋式の意匠をもつ洋風のモダンな建築で、鉄筋鉄骨造り地下 1 階地上 6 階建てで当時盛岡随一の高層建物であった。昭和天皇の結婚を記念して、他の公会堂と同様「官営」の集会場として建てられたものであり(本杉ら、1995: 402)、大ホールの他に会議室も作

となどが考えられる(徳永、2000: 70-76)。その結果、地方で有名な役者たちを直接観る機会が増え、歌舞伎は特に地方で大変な人気であり、需要が高かったという(中川、2009: 75)。

³⁵ 『盛岡市史 第 12 分冊』には昭和 20 (1945) 年の盛岡劇場の出演者として「尾上菊五郎・市川男女蔵一座」と掲載されている(p.117)。これを含め、『盛岡市史 第 12 分冊』に掲載された大正から戦前までの盛岡劇場の出演者についての記載内容(pp.116-117)については『盛岡劇場ものがたり』掲載の情報と時期などが不一致のものも多い。

³⁶ 以下の話が明治 37 (1904) 年生まれの盛岡芸者、都多丸さんの話として残っている(『盛岡劇場ものがたり』p.98)。大正 10 (1921) 年、大阪大歌舞伎で劇壇の王者といわれた名優初代中村鴈治郎が公演を行ったが、不入りで興行を切り上げて帰ってしまった。不入りになったその理由は、普通の客は入れない程の高額な入場料と、同じ日程で盛岡に帰省していた原敬が園遊会(茶話会)を開催したためだったという。「鴈治郎は、原さんに負けたんです。いい芝居だったんですよ。」これは、原が暗殺される 3 ヶ月程前のことである。

られた。翌年昭和天皇が陸軍の大演習のために盛岡に滞在した際には大本営として、御座所として利用された(『盛岡市の歴史 下』p.128、『図説盛岡四百年 下巻 II』p.122)。建物の一部は改修されているもののほとんど当時の姿で現存し、平成 18 (2006) 年には国の登録有形文化財として登録されている。当時の県公会堂は、県庁に隣接するという地の利に加え(建物の一部は昭和 40 (1965) 年まで県会議事堂として利用されていた)(図 3)、岩手県と盛岡市が出資したいわば公共施設で使用料も安く、昭和 6 (1931) 年の使用料をみると、盛岡劇場が一晩 100 円、藤澤座でも 70 ~ 50 円であるのに対して、県公会堂では電灯掃除料込み 40 円で貸していたという(『盛岡劇場ものがたり』p.149)。盛岡劇場は小屋主でありかつ興行会社でもあったので、興行の不入りはダメージが大きかったという(『盛岡劇場ものがたり』p.144)。

(4)戦後の盛岡劇場と谷村文化センター

戦後になると、戦時中統制下に置かれていたさまざまな文化活動が再開され、戦前以上に多様なプログラムが盛岡劇場でも開催された。例えば、終戦翌年の昭和 21 (1946) 年には、すでに歌舞伎、能、在京の劇団などの公演が記録されている。また、翌年からは盛岡市町内芸能コンクールや芸能大会などが頻繁に開催され人気を集めたという(『盛岡劇場ものがたり』p.129)。これらは、戦時中軍隊で開かれた慰問会などで覚えた歌や踊りを若者たちが演じるもので、当時の盛岡の人たちは盛岡劇場の舞台上、新しい時代に自由に歌い踊ることができる喜びを感じていたのかもしれない。なかでも演劇は、全国的に隆盛をみせ、岩手でも地域、職場、学校など、さまざまな領域でアマチュアの演劇活動が誕生したという³⁷。

しかし、戦争が終わった頃には開場から 30 年以上が経過し建物の老朽化も進んで、盛岡劇場の利用率は戦後数年で

³⁷ 盛岡を中心とした岩手の演劇活動の経緯は、『新版 岩手百科事典』の「演劇活動」の項目に詳しい(pp.82-83)。この項目は、岩手県西和賀町(旧湯田町)にあるぶどう座の川村光夫などによって書かれたもので、学生演劇、職場演劇、青年演劇、地域演劇に分けて記述されている。

徐々に低下していった³⁸。『盛岡劇場ものがたり』ではこの時期を「苦難の時代」と呼んでいる (p.144)。

昭和31(1956)年、芸術文化に理解があった実業家谷村貞治³⁹(参議院議員でもあった)がオーナーとなって再建に乗りだし、盛岡劇場は「谷村文化センター」として再スタートを切った。翌年、改修が行われ、柵席はすべて椅子席となったが(計750席)、回り舞台、花道などの装置は残った。谷村文化センターになって以降の上演記録を見ると、文学座など在京の劇団、東京大歌舞伎など大手のプロ集団による公演も開催されているがそれほどの数ではない。また、講演会、寄席、浪曲からヌードショーまでさまざまな催しの会場としても利用されたといい、実態としては「活況と言うにはほど遠い」(『盛岡劇場ものがたり』p.148)状況であった。日本舞踊の発表会、民謡や大学演劇などの東北大会、岩手芸術祭⁴⁰の邦舞部門など、地元で根ざした公演の比率が高くなっていることも読み取れる。

そのようななかでも、盛岡劇場を会場に継続して上演されたのが「文士劇」である。文士劇は明治中期以降東京で上演された、俳優以外の作家、劇評家、画家などが演じる余興のような素人劇のことである。盛岡では現在も「文士劇」が行われているが、それは昭和24(1949)年の年末に、盛岡在住の作家や画家、地元紙の関係者などが中心となって始まったもので、第1回公演は県公会堂で開かれ益金は寄付された⁴¹。以降歳末助け合い運動の一環として毎年行

われていくが、昭和31(1956)年の第8回公演からは谷村文化センターでの開催となり、昭和37(1962)年まで続いた。満員の客が詰めかけたのは、地元の有名人が開く忘年会のような側面が人々の興味を引いたこともあるだろうが、やはり昔からの「芸好み」の土地柄なのかもしれない。

文士劇のように話題性のある演目も上演されたが、県公会堂が昭和35(1960)年に改修され多くの催し物が大ホールで開催されるようになったこともあり⁴²、谷村文化センターの利用は少なくなっていった。昭和43(1968)年にオーナーの谷村貞治が亡くなると、1階の座席などを取り外して谷村の関係する飲料販売会社の倉庫となり、結果的にこれが初代盛岡劇場の劇場としての最後となった。

翌年には倉庫としても利用されなくなり、老朽化した初代の盛岡劇場はそのままその後15年間放棄された。当時の劇場の様子は、「(昭和)40年代後半、建物は無残に荒れ果てて戸締まりもできないありさまだった。勝手に侵入し火など炊かれては困るので、町内の有志が随分気を遣ったという」(盛岡の演劇鑑賞運動団体の代表であった佐藤サダ子による回想。『盛岡劇場ものがたり』p.136)。また、盛岡の町並みを撮影した写真家であり建築家である伊山治男の写真集『あの角を曲がれば 心に残る盛岡のしらべ 昭和52-60年』には、昭和52(1977)年に撮影された盛岡劇場(谷村文化センター)の写真が掲載されている。白い壁ははがれ落ち、ルネッサンス調の窓はガラスが割れ半開きのままで、廃屋といってもいい姿である。65年前のこけら落としの賑わいを知る人は少なかつただろうが、当時の人々はこの荒れ果てた盛岡劇場をどのように見ていたのだろうか。

³⁸ 『盛岡市史 第12分冊』ではこの頃「閉鎖同様の状態」(p.117)となっているが、『盛岡劇場ものがたり』によると、一番記録されている演目が少ない昭和20年代後半にも、大歌舞伎、各種演劇、舞踊、民謡など年に3~5公演が上演されている。

³⁹ 明治29年(1896)年に現在の花巻市石鳥谷町に生まれた谷村貞治は画期的な通信機器を発明しそれを生産する製作所を起し、財をなした実業家であった(『岩手の先人100人』pp.262-264)。

⁴⁰ 岩手芸術祭は、県民の芸術文化活動の成果を発表し、県民に鑑賞の機会を提供する目的で昭和22(1947)年に始まり現在も続く岩手県における総合的な芸術祭で、現在では美術展、県民芸芸、演劇、伝統芸能、音楽、舞踊、映像、民謡、小中高校美術展の各部門が開催されている。

⁴¹ 現在の盛岡文士劇で中心的な役割を担う作家高橋克彦によると、当時の盛岡文士劇の呼びかけ人の一人である鈴木彦次郎(盛岡在住の作家)は、友人の作家で文藝春秋社社主であった菊池寛から「文士劇」という呼称を許してもらったのだという。東京では昭和初期から文藝春秋社が文士劇を主催していたが、戦時中に中断されたままになっていた。高橋は、盛岡文士劇の開始が東京

での再開(昭和27(1952)年)より早いことについて「まさか3年も先駆けていたなんて、今も信じられない」という(『盛岡文士劇』p.81)。

⁴² 後述のように昭和48(1973)年に岩手県民会館ができるまで、岩手県公会堂が地域の文化活動に果たした功績は大きいという(『新版 岩手百科事典』p.83)。

2. 盛岡劇場の再建

(1) 初代盛岡劇場の最後と新劇場設立の背景

盛岡劇場の再建は、初代盛岡劇場の最後の瞬間に始まったといえるかもしれない。引き続き『盛岡劇場ものがたり』から経緯をまとめていく。以下この節では、特に示さない限り『盛岡劇場ものがたり』からの引用である。

15年間近く野ざらしになった初代盛岡劇場は、昭和58(1983)年に取り壊すことになり、内部調査や記録が行われた。取り壊しが決まる前から、廃墟に近いような状況になった盛岡劇場を見直す気運が地元河南地区の商店街などにあったといい、地元の商店主たちは保存活用を考えたようだが、建物の状態が悪く、実現しなかったという(p.180)。取り壊し前に撮影された劇場内の写真を見ると、舞台上には壊れた道具類などが散乱し、双鶴紋(南部藩に縁の紋で向かい鶴ともいう)がついた緞帳は外れかかって斜めにぶら下がっている。2、3階には座席も残っていて客席であるのがわかるが、1階は倉庫として利用されたままになっている(p.183-185)。

同年3月20日、地元の有志による「お別れ会」が開催された。地元の人たちが早朝から劇場内を掃除したという。お別れ会には約200名の市民、また市長や演劇関係者が参加し、盛岡芸者総出演の踊りや演奏が披露された。『盛岡劇場ものがたり』には、このお別れ会の様子を写した写真が掲載されている(pp.188-191)。盛岡劇場の最後の姿はそこが舞台なのかどうかすらわからない。背景も引き幕すらなく床にはゴザを敷いた舞台にパイプ椅子の客席で「東北一」だった往時の姿は見いだせないが、しかし、そのように変わり果てた劇場を最後に見るために多くの人たちが詰めかけた様子が見て取れる⁴³。その時期に開催中だった盛岡市議会で、盛岡劇場の復活と再開を求める議員の質問に対し、当時の市長太田大三は「旧盛岡劇場に対します市民感情(愛

情)や、またあの建物の、設計的にも優れたものであるということも承知しております」と答弁しており、盛岡の人たちのなかに盛岡劇場に対する特別な思いがあることが、行政関係者にも理解されていたことがうかがわれる(p.182)。

このような地域の人たちの動きは、盛岡劇場の取り壊しまでの過程で大きなものになっていった。このような活動をする人のなかに盛岡劇場の近隣に生まれ育った人や熱心に活動する若手の地元商店主、また市議会議員がいたことや、文化ホールを持っていなかった盛岡市が設置を検討していた時期であったことなど、さまざまな要因が重なって、3月22日に取り壊し工事が始まった頃には、新しいホールの設置が多くの人たちの強い願望となっていたようである(pp.182-187)。これらの人たちが集まって「盛岡劇場をつくる会」が結成され提言を行うなど、地元の人たちの願いには、文化活動を鑑賞し参加していきたいという意欲とともに、初代盛岡劇場が設立された時と共通する地域の活性化への期待が読み取れる。

また、日本全体で小劇場演劇が隆盛となり、盛岡市内で適当な公演会場を求めていた盛岡の演劇関係者にとっても、演劇を上演するのに適する施設の設置が必要となっていた(p.186)。初代の盛岡劇場が劇場として閉館した後の昭和40年代後半、プロ演劇の主要会場は先述の岩手県公会堂であった。盛岡市内で上演された演劇をまとめた『盛岡・演劇鑑賞運動 1957-1998』を見ると、その頃の県公会堂ではさまざまな演劇が数多く上演されていたことがわかる。昭和40(1965)年開館の岩手教育会館なども一部では利用されたがこちらは集会のための設計で、演劇などにはあまり向いていなかったという。昭和48(1973)年に約2,000人を収容可能な大ホールを持つ岩手県民会館が開館すると(図3)⁴⁴、集客が見込めるプロの演劇などは県民会館で開催されることが増えていったが、演劇専用の会場での上演を望むプロの劇団や役者もおおり、また盛んだったアマチ

⁴³ このお別れ会の写真を見ると、舞台の上に「さようなら旧盛岡劇場」という横幕がかかっている。谷村文化センターの「前の」盛岡劇場、という意味かもしれないが、新盛岡劇場の建設が決まるのはこの後である。しかし、すでにこの時「旧」盛岡劇場という表現がなされていたことは、関係者にははっきりとした再建の意向(希望)があったのかもしれない。

⁴⁴ 岩手県民会館には、大ホールの他に約600席の中ホール、展示室、会議室などがある。

ユア演劇にとっては、盛岡には希望するような会場がなかったのであろう。県公会堂が老朽化し舞台も狭かったことから利用が減少してきた昭和50年代後半になると、このような演劇関係者にとって、盛岡劇場の再建は大きな期待となっていたと思われる。さらに、いわゆる商業演劇のみならず大規模コンサートやバレエなどの本格的な舞台芸術が地方都市でも頻繁に鑑賞できるようになり、盛岡でそのような催しが開催可能な唯一の会場であった県民会館が、受け入れ数の限界となってきたことも指摘されている(p.186)。

このような流れのなかで、昭和61(1986)年、盛岡市は市制百周年記念事業の一つとして劇場の再建を決め、用地の買収、基本構想の検討に入った。

(2)新盛岡劇場の再建

検討の結果、初代盛岡劇場があった場所(現在は町名変更され盛岡市松尾町)に、演劇を中心とする400~500名規模のホールと平土間式の多目的ホールの2つをもつ施設として劇場が計画された。また設置が予定されていた公民館を併設し、市民からの要望でもあった初代盛岡劇場のイメージを外観に反映すること、名前も盛岡劇場とすることなどが決まり、平成2(1990)年、現在の盛岡劇場は完成した⁴⁵。

6月30日に行われた、新しい盛岡劇場でのこけら落とし公演は大歌舞伎、当代の松本幸四郎一座であった。76年前に初代盛岡劇場の開場興行を行った七世幸四郎の孫である。その時と同じく幸四郎をたくさんの地域の人たちが出迎えたという。2日間の公演は満員の客を集め、初代盛岡劇場を知る関係者は当日のことを「盛劇が帰ってきたのだなあ」と(中略)ジーンとこみ上げてきました。若いお客様も大勢いらして、盛岡の芸能文化の厚さを感じました」(p.196)

⁴⁵ 盛岡劇場には計画通り2つのホールがあるが、メインホールは客席数511席、仮設の花道があり、最新の舞台装置をもつ劇場となっている。また、もうひとつのタウンホールは、利用状況に応じて舞台や客席の設定が可能なオープンスペースで移動席を100~200設置でき、演劇のほかコンサートなどにも利用される(財団法人盛岡市文化振興事業団ウェブサイト「盛岡劇場・施設案内」より)。



図5. 現在の盛岡劇場

と残している。

新しくなった盛岡劇場は、その後も数多くのプロの演劇を上演し、そして地域のさまざまな劇団(学校演劇を含む)の活動の場ともなっている。現代劇のみならず、歌舞伎や能などの古典芸能やミュージカルなど、多様な演目にも対応し、その他にも各種演劇フェスティバルの開催、盛岡文士劇の復活公演(昭和37(1962)年を最後に中断していたが平成7(1995)年に再開)⁴⁶、さらにコンサートや落語など多様な舞台芸術が行われている。また、盛岡の人たちの多様な文化活動の発表会や、各種行事の会場としても頻繁に利用されている。

以上のように、再建された盛岡劇場は近代的な設備をもち多様な演目上演される公共の文化施設だが、三角になった中央の屋根など初代盛岡劇場を彷彿とさせるものがあり、まさに「再建」というにふさわしい外観になっている(図5)。このように再建された盛岡劇場は、盛岡の舞台芸術の中心的役割を担う劇場のひとつとして現在も大きな役割を果たしているといえるのである。

⁴⁶ 盛岡文士劇はその後も続いていて、昨年(平成23(2011)年)も12月4日から2日間に渡って盛岡劇場でたくさんの観客を集めて開催された。盛岡在住の作家や地元放送局のアナウンサーなどが出演し、世界遺産に登録された平泉をモチーフにした芝居などを上演した。東京では文藝春秋社主催の文士劇が昭和52(1977)年を最後に上演されなくなり、現在は盛岡にのみ「文士劇」という名が残っているようである。

表4. 盛岡市内芝居小屋・劇場のあゆみ

年(西暦)	新富座／内丸座	藤澤座	盛岡劇場	市内の劇場等の動向
明治 12(1879) 17(1884) 28(1895) 年代不詳 35(1902)	賑富座開場 内丸座に？	開場 原敬演説会開催		河南大火、寄席・芝居小屋等焼失
大正 2(1913) 4(1915) 5(1916) 6(1917) 8(1919)	映画専門館に	映画専門館に	開場 映画上映行う	市内初の映画専門館・記念館開場
昭和 2(1927) 5(1930) 9(1934) 12(1937) 16(1941) 20年代後半 32(1957) 35(1960) 40(1965) 42(1967) 43(1968) 44(1969) 48(1973) 58(1983)	 「SY内丸」となる	火災により焼失、再建 休館 「衆楽座」として再建 「国民劇場」となる 閉館	戦争末期には倉庫に 利用率低下 改装オープン 倉庫に 使用されなくなる 取り壊し	岩手県公会堂開場 岩手県公会堂改修 岩手教育会館開場 岩手県民会館開場
平成 2(1990) 8(1996) 9(1997)	閉館		再建	盛岡市民文化ホール開場

注 内丸座(賑富座)、藤澤座のその後の名称変更は主なものだけを記載している。

IV. 考察：地方都市における芝居小屋の盛衰の背景

以上のように、本稿では明治以降に設置された芝居(演劇)上演のための劇場の設立そして衰退の経緯について、盛岡市を事例にみてきた(表4)。そこから明らかになったことについて、以下に述べていきたい。

1. 芝居小屋の「再発見」と「再建」

明治期から大正期に盛岡市内に作られた3つの芝居小屋・劇場のうち2つはすでになく、現在も存在するのは盛岡劇場のみである。しかしそれは利用されることなく放棄され断絶した期間の後に再建された劇場であった。日本中の多くの地方都市と同様に、盛岡もさまざまな過程のなかで芝居小屋を失ったのである。結果として貴重な芝居小屋が残った場合と比べると、確かに両者には大きな違いがあ

るように思える。しかしそこには、共通するプロセスが読み取れる。

冒頭にあげた日本各地に現存する20余りの芝居小屋をみればわかるように、それらの芝居小屋のほとんどは、地方公共団体の所有であり、また公共的な組織が運営する。芝居小屋の建物やさまざまな人たちがそこに集うその機能が持つ公共性が、現在の社会全体にとって大きな意味を持つからだろう。現存する芝居小屋は失われるその寸前に「再発見」され、その公共的な価値が再評価されたものと考えられることができる。一方、盛岡劇場は一旦失われ近代的な建物に替わっているものの、芝居小屋と同様の公共性をもつ劇場として盛岡という地域に必要とされ「再建」されたということではないだろうか。

日本全国で数千あったとも考えられる芝居小屋のほとん

どは廃棄され、存在したこと自体が忘れられつつある。「再発見」も「再建」もされずに消えていった芝居小屋にも、同様に地域資源としての大きな価値があったはずだが、それはすでに失われてしまっているのである。

2. 芝居小屋衰退の背景：映画館化の波

盛岡で廃館した2つの芝居小屋はいずれも当初は歌舞伎を上演できる舞台機構をもった日本的な劇場であったが、多様な目的のために使用され、最終的には大正から昭和初期に映画専門館へ転向していた。映画館になった両館ともその後廃館し建物も現存していないのは、昭和30年代後半からのテレビの普及などによって娯楽嗜好の大きな変化が起き決定的な影響を受けたことによる。

その点から考えると、再建された盛岡劇場はどのように最初の大きな変化である「映画館化」を乗り越えたのだろうか。明治期にできた2つの芝居小屋も含め、3つの劇場はいずれも演劇（歌舞伎）のための舞台装置をもっていた。盛岡劇場より20～30年前から芝居小屋として利用されていた内丸座、藤澤座は、映画という新しい娯楽の普及する時期にはすでに「古い芝居小屋」となっており、経営者側からすればいち早く映画を取り入れる必要があっただろう。一方の盛岡劇場は、当時最先端の舞台装置をもち新しい時代に合った運営方針を掲げた盛岡で唯一の演劇のための劇場として、盛岡初の映画専門館が開館する直前（2年前）に開場したのであった。その後も次々と市内に映画館ができ映画は急速に普及していくが、先行する二座と比べ新しい演劇が上演できるという盛岡劇場の特徴がそれぞれの役割を分化させ、いうならば「棲み分け」となって大正期から昭和初期の映画館化の波を乗り越えることになったのではないだろうか。

さらに、盛岡劇場も開場から30年ほどが経ち、先行の二座と同様に最初の老朽化の時期になったその頃（昭和20年代末頃）には、映画館化の流れはすでに終わり、盛岡市内の既存の映画館は過当競争というべき事態になっていた（さらに約10年後からは映画自体の停滞が始まる）。いうならば「映画館化の波」に乗り遅れたことが盛岡劇場の

その後の再建の背景の1つと考えることもできる。

3. 演劇をめぐる消費と生産

江戸期から芝居小屋は悪所のひとつといわれ忌避される一方、人々の関心を集め経済的な豊かさを生み出す場所でもあった。現在では文化ホールなどの施設は地域活性化のための有力な資源として考えられることが多い。まさに盛岡劇場周辺の商店街等にとってみれば、初代の開業の時もそして劇場の再建の時でも劇場に対して地域資源としての期待をもっていたことがわかる。ただし、その期待は単純な経済的活性化というものだけではなく、純粋に芝居（や多くの芸術や娯楽）を楽しむ観客としての、いうならば芝居の消費者としての期待でもあったのではないか。

江戸期以来の庶民の街であり古くは寄席や芝居小屋、そして映画館などが建ち並んでいた河南地区の人々にとっては、舞台上で演じられる演劇や音楽は非常に身近なものであった。そのような環境が、芝居小屋が消えかけた時に、劇場やそこで演じられるものを見て聞いて楽しむことを自ら求め生み出す（劇場を再建する）ことの背景にあったのではないだろうか。いうならば劇場／芝居の需要の潜在的な蓄積が、盛岡劇場周辺にはあったと考えられるのである。

一方で、盛岡劇場が再建された背景のもう一つの要素には、いうならば劇場／芝居の供給側の問題があるように思われる。先述の通り、初代盛岡劇場は小屋主でありかつ興行主でもあり、それが経営を困難にさせたわけだが、現代的な目でみれば演目には関与しない貸しホールとしてではなく、劇場のソフト面に関与しながら経営をしてきたことになる。初代盛岡劇場の末期、古くなった劇場に有名な俳優が来ることは少なくなったが、その代わりに日本舞踊や学生演劇やあるいはピアノの演奏など、さまざまな形で多くの盛岡の人々が真剣にそして楽しみながら舞台上上がったのではないだろうか。

現在の経営形態になった後も、盛岡の人たちが観たいと思うプロの本格的な演目だけではなく地域の演劇などの上演にも多数利用されてきたことは、つまり、地域の人々が観客という消費者にとどまらず、劇場／芝居の供給者・生

産者であったからこそ、「私たちの劇場」という地元の人々、演劇関係者の意識を作り出すことになったと考えられる。

4. 公共文化施設との関係

最後に指摘したいのは、盛岡市内の他の公共文化施設との関係である。盛岡劇場の発展、停滞、そして再建のプロセスには、主に岩手県公会堂と岩手県民会館という公共文化施設の設置やその特徴が大きな影響を及ぼしていた。

芝居小屋と現代の公共文化施設は、建物のもつ価値など相違点も多い。しかし、長い歴史のなかでその地域に根づいている芝居小屋と現代の公共の文化施設は、地域において文化活動の場としての役割を持っている点で共通している。それだけに、そういった地域内の公共文化施設との目的、劇場としての特徴の違いは重要になってくる。映画が娯楽の中心になり演劇のニーズが減少した時にも、盛岡劇場はライバルである県公会堂とは違う演劇のための劇場としての特質を失わず存在し続けることができた。また、その役割も時間的な経過のなかで変化する。県民会館が対応しきれないほどのコンテンツが盛岡という地方都市にもあふれ始めた時、新しい盛岡劇場は真に必要とされたといえる。このような公共施設との役割的、時間的な関係性が絶妙のタイミングで盛岡劇場の歴史を作り出した。

そのように考えると、初代盛岡劇場が利用されず、しかし取り壊されずにいた15年近くの時間も、新しい盛岡劇場をつくり出すために必要な時間だったのかもしれない。他の失われた芝居小屋を調べると、現在ではそこに劇場があったことさえ全くわからない。このような変化が盛岡だけではなく多くの地方都市にはある。廃屋同然になっても盛岡劇場がそこにあり続けたことが、身近に劇場があるということはどのようなことなのかを思い出させ、劇場がなくなることで今何が失われているのかを、盛岡の人たちに伝え続ける役割を果たしたのではないかと。

冒頭で紹介した徳永による現存する芝居小屋の一覧を見ると、演劇などの文化ニーズが高い大都市に芝居小屋が残ったとは、必ずしもいえない。全国にあったほとんどの芝居小屋は、娯楽嗜好の変化の時期に廃館しあるいは映画館

になったと考えられる⁴⁷。映画館化の波を乗り切って(乗り遅れて)劇場としてあり続けた芝居小屋はおそらく多くはなく、残ったとしても周辺に公共の文化施設がつくられるなかで役割の棲み分けとタイミングがうまくいき、芝居小屋としての公共的な役割を継続するのは大変困難であったと思われる。そのようななかで、再建されることでその役割を現在も担い続けているのが盛岡劇場であるといえる。

〔付記〕本論文の引用内では、資料の旧漢字や送り仮名を現代のものに一部改めた。

また本稿は、科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究「地域資源としての伝統的地域劇場：東北地方の事例から」(課題番号23653120)の研究成果の一部である。

引用文献

- 服部幸雄 2007 『歌舞伎の原郷 地芝居と都市の芝居小屋』吉川弘文堂。
- 伊藤友久 2005 「農村舞台から芝居小屋へ 信州における劇場転換期の一様相」『長野県立歴史館研究紀要』11: 38-49。
- 小林徹也・中川武・米山勇 1996 「旧帝国劇場の復元的考察 明治末から昭和初期にかけての演劇運動と建築に関する考察 5」『1996年度日本建築学会関東支部研究報告集』: 453-456。
- 本杉省三・小根山仁志・小谷喬之助・逆瀬川和孝 1995 「大型公会堂への過程と役割 近代東京における演劇改良から公会堂誕生への変遷(その3)」『日本建築学会大会学術講演梗概集(北海道)』: 401-402。
- 中川右介 2009 『團十郎と歌右衛門 悲劇の「神」と孤高の「女帝」』幻冬舎新書。
- 小根山仁志・小谷喬之助・本杉省三・逆瀬川和孝 1995 「明治期における演劇改良と劇場の近代化 近代東京における演劇改良から公会堂誕生への変遷(その1)」『日本建築学会大会学術講演梗概集(北海道)』: 397-398。
- 徳永高志 2000 『劇場と演劇の文化経済学』(文化経済学ライブラリー8)芙蓉書房出版。

⁴⁷ 長野県信州の芝居小屋全体の把握を試みた伊藤(2005)によると、明治から昭和30年代に建設された芝居小屋は約70あるが、伊藤が調査を開始した昭和56(1981)年時点ではひとつも現存していなかったという。

- 徳永高志 2010 『公共文化施設の歴史と展望』晃洋書房。
徳永高志 2011 「劇場をつくる・地域をつむぐ」井口貢
編著『地域の自律的蘇生と文化政策の役割—教育から協育、「まちづくり」から「まちつむぎ」へ』学
文社, pp.53-75.
- 引用参考資料 (タイトル 50 音順)
伊山治男 2004 『あの角を曲がれば 心に残る盛岡のし
らべ 昭和 52-60 年 (復刻版)』「あの角を曲がれば」
復刻する会。
浦田敬三・藤井茂 1988 『いわて人物ごよみ』熊谷印刷
出版部。
岩手日報出版部 (編) 1987 『岩手の先人 100 人』岩手
日報社 (工藤正治「谷村貞治 画期的な電信機器の
発明家」 pp.262-264)。
小木新造ほか (編) 2003 『江戸東京学事典 新装版』
三省堂 (「演劇・劇場」 pp.834-835)。
宮澤清六他 (編) 2001 『【新】校本宮澤賢治全集 第
16 卷 (下) 補遺・資料 年譜篇』筑摩書房。
岩手放送岩手百科事典発行本部 (編) 1988 『新版 岩
手百科事典』岩手放送。
吉田義昭・及川和哉 (編著) 1992 『図説盛岡四百年下
巻Ⅱ 明治・大正・昭和編』郷土文化研究会。
小学館 (編) 1988 『日本大百科全書 第 20 巻』小学館
(「文士劇」 p.824)。
盛内政志 1976 『盛岡映画今昔』地方公論社。
盛岡演劇鑑賞運動 40 年誌刊行委員会 (編) 2000 『盛岡・
演劇鑑賞運動 1957-1998』盛岡演劇鑑賞会。
盛岡劇場・盛岡劇場史編集委員会・岩手日報社 (編) 1996
『盛岡劇場ものがたり』岩手日報社・川口印刷。
盛岡タイムス (編) 1993 『盛岡古地図 (明治 43 年、大
正 9 年)』盛岡タイムス社。
盛岡市 1951 『盛岡市史 第 5 分冊 近世期下』
盛岡市 1960 『盛岡市史 第 12 分冊 明治大正昭和 生
活』
森ノブ 2011 「盛岡市長小泉多三郎の中学生日記 (資料
紹介)」『岩手の古文書』 25 : 2-9。
森ノブ・多田代三著／岩手県文化財愛護協会編 1992 『盛
岡市の歴史 下』熊谷印刷出版部。
盛岡市 1970 『盛岡の歩み 盛岡市制施行 80 周年記念』
高橋克彦 2010 「盛岡文士劇」『文藝春秋』文藝春秋, 2010
年 1 月号 : 80-82。
吉田義昭 1995 『盛岡 明治大正昭和「事始め百話」』郷
土文化研究会。

引用参考ウェブサイト

- 「芝居小屋の現在」 <http://www003.upp.so-net.ne.jp/jyoururi/>
「盛岡劇場」 (財団法人盛岡市文化振興事業団)
<http://www.mfca.jp/institution/morigeki/index.html>
「もりおか映画散歩」 (盛岡市商工観光部)
<http://cinecitta-morioka.jp/index.html>
「映画の街盛岡」 (映画の街盛岡推進事業実行委員会) 「な
つかしの映画館マップ情報」
<http://www.odori.or.jp/cinema-street/index.html>
「岩手県公会堂」 <http://iwate-kokaido.jp/>
「いわての文化情報大事典」 (岩手県政策地域部)
<http://www.bunka.pref.iwate.jp/>